「強くしてくださる神様」

エフェソの信徒への手紙 6:10−24

２０２３年１１月12日

野村　友美 師

＜戦う神の民＞

今日は幼児祝福式を予定していましたが、残念ながら子どもたちがここに来ることはできませんでした。それでも、子どもが教会にいてくれるというだけで、何だか嬉しくて幸せな気持ちになりますね。子どもたちがこれからどんな道を歩んで、どんなところに居るときも、神様が一人一人を守って、導いて、祝福していてくださることを信じて、子どもたちの健やかな成長をご一緒に祈り続けたいと思います。

子どもたちだけじゃなくて、昔子どもだったお一人お一人のことも神様はいつだって傍にいて、守り導いてくださっています。もちろん、生きていくのは簡単なことじゃありません。

時には「神様、どうしてですか？」って叫びたくなるようなことにも私たちは出会わされるでしょう。それでも、私たちの人生のいろんな場面で、神様は私たちの思いや願いをはるかに超える出来事を見せてくださいます。

一人一人の「生きる」という戦いを、神様が一緒に戦ってくださる。

その戦いの中から、驚くような恵みを生み出してくださる。この信仰を灯火として、先の見えない人生の旅路を歩いていくのが私たち、クリスチャンと呼ばれる者の生き方だと言えるんじゃないでしょうか。

７月からみなさんと一緒に読んできたエフェソの信徒への手紙もいよいよ今日で最後になりました。ここまでずっとパウロは、教会の中での関わり、そしてそれぞれの生活の中での人間関係を通して、イエス様に従って神様の愛を生きるようにと教えてきました。この世界で生きて働くイエス様の体として、神様の愛によってお互いに結び合わされて、神の国の姿を人々に伝える。

それが、すべての教会に神様から与えられている役割だ、と言葉を尽くして語ったその最後に、パウロはこう訴えています。

強くなりなさい。悪魔の策略に対抗してしっかり立つことができるように、主である神様に依り頼んで、神様の偉大な力によって強くなりなさい。

私たちは戦わなきゃいけないんだから、とパウロはこの手紙を読むすべての教会に向かってそう伝えているんです。

イエス様の体、神の国のスタート地点である教会が　この世界で戦わなくてはいけない相手。

それは目に見える誰かや何かじゃなくて、目には見えないけど私たち人間を支配している力だと、パウロは説明します。

権力や武力を持った一部の人が、自分たちの思うままに人々を押さえつけて、支配して、都合よく従わせる、社会の力。どんな人もみんな神様から愛されて、大切に思われているという一人一人の尊厳を、踏みにじる力。神様の愛と恵みを無視し

て、不安や欲望で私たちを動かそうとする、悪の力。神の国とは真逆の方向を目指そうとする、そんな私たち自身の罪の力に対抗して戦いなさい。そのために、あなたたちは神様の武具を身につけなさい、とパウロはこの手紙のしめくくりに、教会に集まるすべての人に呼びかけているんです。

＜神様の武具＞

自分さえしっかりしていれば負けないはずだ。ちょっとぐらい妥協しても私は大丈夫。そんな風に油断しているうちに、抵抗もできないままで罪の力に飲み込まれてしまう。そういう危うさを、パウロはよくよく身に沁みて知っていたんじゃないでしょうか。

信仰があるから、と自信を持っていたって、自分だけで罪の力に抵抗できる人なんか誰もいません。だから、私たちが強くなるためのたった一つの方法、神様の力を信じて頼るというやり方を、パウロは改めて教えているんです。

「身に着けなさい」とここで挙げられている６つの武具。まず１つめは、帯として腰に締める神様の「真理」。そして２つめは、胸当として付ける神様の「正義」。３つめは、履物として足を守る「平和の福音を告げる準備」です。

帯と胸当と履物。

それは戦いや仕事に取り掛かるために、最初に身につける装備です。この世界のすべてをお造りになって、そのすべてを「良い」と言われた神様の愛の真理を、そしてその愛を実行される神様の正しさを、何よりもまず初めに信じて頼りなさい。そして、その神様が私たちに与えてくださった平和の福音、すべての人の尊厳が神様の権威のもとに守られる「神の国」の良い知らせを伝えるために、送り出される準備をしなさい。そうパウロは初めに勧めています。

その上で４つめの武具として、あなたたちを守る盾、信仰を掲げなさい、とパウロは言うんです。ここで使われている「盾」の元々の言葉は、全身を守ることができる長い盾を意味するものです。神様の愛と正しさに信頼して、神の国を伝えるために送り出されていることを自覚して、その上で信仰をいつも目の前に掲げているなら。

それはあなたたちを隅から隅までしっかり守る盾になる、とこの４つめの武具は約束しているんです。

そして５つめにパウロは、神様からの「救い」を兜としてかぶるようにと告げます。「救いを兜としてかぶる」というこの表現は、旧約聖書のイザヤ書にも登場するものです。

「主は恵みの御業を鎧としてまとい、救いを兜としてかぶり、報復を衣としてまとい、熱情を上着として身を包まれた。」（イザヤ５９：１７）

神様を無視してしまう罪に抵抗できない人間たちを、その罪の力から救い出すために、神様ご自身が戦われる。この力強さを、預言者イザヤは武

装する神様のイメージで語りました。
同じように、あなたたちを通して神様ご自身が力強く働かれる。このことに信頼しなさい、とパウロはイザヤの言葉をなぞって、新しい神様の民である教会に伝えているんです。
そして最後の武具は、霊の剣、つまり「神の言葉」だとパウロは告げ知らせます。
剣はここに挙げられた６つの武具の中でただ一つ、守るだけじゃなくて力をふるう武器です。
ただし、この霊の剣、神様の言葉は決して「聖書にこう書いてある。神様はこう言っておられる」と相手を上から叩きのめすための武器ではありません。
新約聖書が書かれた元々の言葉、ギリシャ語では、聖書が伝える神様の言葉を「ロゴス」という単語で表現しています。ですが、この霊の剣としての「神の言葉」には、「レーマ」という別の単語が使われているんです。「レーマ」は、誰かの口から出された言葉を意味するものです。
つまりここでパウロが言っている「神の言葉」とは、神様の霊である聖霊が私たちの口に語らせる言葉です。イエス様によって救われた者たちの群れ、教会が語る言葉。神様の愛と恵みを証言する、一人一人の言葉。
それこそが、罪の暗闇を切り裂く霊の剣なんです。
だからパウロは、霊の剣について語ったその後に続けて具体的な戦い方を教えています。
どんな時にも聖霊に助けられて祈り、願い求めなさい。すべての聖なる者たち、つまり神様に従って働く仲間たちのために絶えず、根気よく祈り続けなさい。そう、聖霊に助けられながら、どんな時も神様に信頼して一緒に祈り続けるのが、私たちに任された戦い方なんです。

＜祈りによって戦う＞

神様の武具を身につけて戦いなさい。聖霊に助けられて祈り続けなさい。パウロはエフェソの教会の人たちに、そしてこの手紙を読むすべての教会の人たちにそう勧めてから、「私のためにも祈ってください！」と頼んでいます。
神様から任されている仕事、イエス様の救いの知らせを時と場所にふさわしい言葉で、勇気を持って大胆に伝えることができるように、私のためにみんなで祈ってください。そう頼んでいるパウロは、実はこの時、牢獄の中にいました。
イエス様について語ったことで「人々を惑わした」と訴えられて、ローマで幽閉されていたようです。
今みたいにメールやSNSなんていう便利な手段はもちろん、電話さえない時代です。だからパウロは自分の詳しい状況を知らせるために、ティキコという人をエフェソに行かせると約束しています。
自分がどんな状態かを知ってもらって、具体的に思い浮かべて祈ってほしかったんでしょう。
それだけパウロは、教会の人たちの祈りに期待して、心から頼りにしていた、ということです。
よく私たちは教会の中で、「あの人の祈りは効きそう」とか「私みたいな不真面目なクリスチャン

が祈っても」なんて聞いたり言ったりすることがあると思います。エフェソの教会の人たちも、手紙を回し読みしたはずの他の教会の人たちも、パウロに比べたらきっとはるかに未熟で無知で、お世辞にも信仰が強いとは言えなかったでしょう。それでも、パウロは「あなたたちに祈ってほしいんだ！」と繰り返して熱烈に頼んでいます。それは、パウロが知っていたからです。

どんなに未熟でも、無知でも、まだまだ弱いところがたくさんあったとしても、そんな彼らの祈りを聞かれるのは神様だ、ということを。

一人一人が神様から呼び集められて、イエス様の体として働く役割を与えられて、聖霊に結び合わせられて成り立っている教会。その教会で、聖霊に助けられて祈る彼らの祈りには、この世界を創られた神様の力が働くことを、パウロは誰よりも知っていました。だから、気心の知れた大事な仲間のティキコを手離してでも、「自分のために祈ってほしい」と、パウロは教会の祈りを頼りにしたんです。祈って一緒に戦ってほしい、と助けを求めたんです。

まず神様の愛と正しさに信頼しなさい。

神の国を伝えるために送り出されていることを自覚して、信仰を自分の目の前に掲げなさい。

自分たちを通して働かれる神様の力強さに信頼しなさい。聖霊によって教えられた、神様の愛とイエス様の救いを伝えなさい。

神様の武具にしっかりと包まれて、祈りによって悪と戦いなさい。パウロの言葉は昔も今もこれからも、すべての教会に向かってそう勧め続けています。

あなたたちは神の国の戦士だ、神様に頼って祈って罪の力と戦いなさい、と励まし続けています。

「戦い」とパウロが表現するぐらいですから、それは決して簡単でも楽なことでもありません。

身につけている神様の武具を、ちょっと油断して外したら私たちはあっという間に、自分たちの罪の力にねじ伏せられてしまうでしょう。

それでも、いえ、だからこそ私たちは一緒に祈って戦うんです。お互いのために祈り合って、教会は日々戦うんです。

私たちの祈りは、人々を傷つけて苦しませている罪の力との戦い、すべての人に神様の平和をもたらすための戦いです。

さあ、今日もここから立ち上がって、神様の武具をまとってそれぞれの戦場へ送り出されていきましょう。

すべての人が神様から愛されている一人一人として尊重されて、与えられた命を喜んで生きられる、神の国の姿を目指して。

平和をもたらす神の国の戦士として、ご一緒に祈りの戦いを戦い抜いてまいりましょう。

お祈りいたします。